

「幼稚園雑草」を圍んで

の　ぎ　く

A つまましい感じ。表紙を見た時、著者と題字の色も、線も。深山がくれに咲く野菊、ま白な、花瓣の裏にうす紅をさしたような、そして芳ばしい香のする、背の小さい野菊、あのやさしいつまましい、そして氣高い姿のよう。

B 「あら、そんな單一な花ぢやあない、雑草は即ち雑草ぢやあないの、雑草の豊かな内容が、そんな一つの花になると消えてしまふような氣がするわ、私には、早春の淡褐色の枯葉の下から、ぐんぐん芽ぐんで出る若緑のいろ／＼な草も、すく／＼と元氣よく伸びる夏の野の草も、その中には細い葉も廣い葉も、繪模様のようなものも夢見るような月見草も、こぼれさくはこべの花も目覺るような日葵も咲く。赤とんぼや、きり

／＼すと一處に晝は子供夜は月の友達になる秋の叢も、枯草の上の日和ぼつこから云へば冬でも、四季を通じて、あらゆる草の自然の姿、生々した、伸び／＼した純真そのもの。それを鉢にとらず根分けをしない、生きた姿、いろ／＼の生命が、踊たり考へたり微笑だり。様々の姿そのまゝで調和してゐる、それが私のうけた感じよ」

C 「私まだその外に、BさんのもAさんのも違ふのではないけど、もつと私に考へないでもすぐなんだか感じるのは、雑草つていふので親しみ深あい、ほんとうにお母さんと子供の間のわざとらしくない親しさ暖かさ、それが一番私には此の本をなつかしく思はせました。それとも一つ舐を正してするのではない、ありのまゝの謙遜、禮儀ではない、生れたまゝのとりつくろはない、謙虚な心が此本の題に、色に、そして文

字の一つくにあふれてゐるように思ひます。

「幼稚園雑草」……なんてありのまゝのへりくだり、と親みのこもつた響と色彩、私すぐさう思ひましたわ」

ある處で「幼稚園雑草」を圍んで、こんな會話がありました。其夜F子は夢中でこの本のペーヂをくつてゐました、また幾度か後戻りもして。ばつと、明るくなつた夜半の電燈の下にやつと我にかへつて本をとぢた彼女は、こんな獨言を云てゐました。

詩だ、詩だ、地を踏むでゐる現實の、生きた人の聲の。架空の光を追ふ瞬間の詩ぢあない。私はずつと以前に讀んだんだ、たしかに、くりかへしよんだ所がある。けれど其時見えなかつた、野が、流れがこゝにある。その時かすかだつた山が、今は、まぎくと目の前にそびえてゐる。

同情、慰安、獎勵、主張、諷刺、希望「ペスタロ

ツチの醉人の妻のようね」誰かどうさう云た。でも「醉人の妻」には、こんな親みはない。「うちのあかない幼稚園教育」私達はよく迷路のように、とかく思をたどつた末にこんな、なげやりをいふ。ほんとうにすまない事だ。

「幼稚園雑草」これは私達の、バイブル。詩篇。よむ毎に廣くなり深くなる。更にこの著者を日本に持つことは私達の爲に、世界の幼稚園の爲に地上の子等のために、何といふ幸福だらう。

幼児教育者は教育學を讀む前に、心理學を研究する前に「幼稚園雑草」をよまなければならぬ。そしてそれは其人の詩篇でなければ。(九、二四)